

運動と身体：人工物に我々が主体性を見出す時

長坂 真澄 (Masumi Nagasaka)

早稲田大学

我々はいかにして人工物——身体的なものであれ、非身体的なものであれ——に主体性を帰属させるにいたるのか。人工物はいかなる条件のもとで、主体性を持つものとして我々に現れるようになるのか。この問いに対し、複数の可能な条件を提示することができるであろう。我々の知覚に供される、人工物の物的特徴や周囲の環境、その運動や我々の働きかけに対する反応、また我々の想像力や推論のあり方も関係すると考えられる。本発表では、とりわけ運動という側面に論点を絞り、中世の惑星の運動をめぐる議論を手掛かりに、可能的な答えの一つを提示することを試みたい。その着想の源となるのは、中世のユダヤ人哲学者マイモニデス(1135-1204)が『迷える者たちのための手引き』で展開した、アリストテレス反駁である。

星は、今日を生きる我々の多くにとって、主体性を持つ生命体ではない。しかし、古代から中世の哲学においてはしばしば、星や、星を抱える天球には、生命が帰属させられてきた。アリストテレスは『自然学』第8巻及び『形而上学』Λ巻において、運動変化の連鎖に着目しつつ、不動の動者すなわち神の存在証明を展開する。この不動の動者は、質料を持たない非身体的なものであり、自らは動かされることなく、天球(σφαῖρα)という身体的なもの(星の付着した透明な球面)を動かすとされる。不動の動者には永遠の生命(ζωή)が備わるとされ、それが動かす天球あるいはその天球が抱える星も、その生命に与るものとして記述されている。

前提となっているアリストテレスの天動説においては、地球が中心にあり、(月、太陽を含む)惑星及び恒星が、それぞれが属する天球の回転運動によって動かされている。ここで、アリストテレスの不動の動者の存在論証で用いられる永遠の円環運動(天球の運動)が、恒常的である以上、等速の運動であるとされるにもかかわらず、惑星(πλανήτης)が複雑な運動をすることが問題となる。というのも、地球から見て惑星は等速の円環運動をするのではなく、減速したり、停止したり、さらには逆行したりするように見えるからである。それらはあたかも戸惑っているかのように彷徨する(πλανᾶν)。アリストテレスはそれゆえ、一つの惑星が帰属する天球のみならず、その天球に影響を及ぼすさらなる天球が複数層をなしていると想定し、それぞれの天球が、その中心を地球の中心と同じくしつつも、軸を異にした円環運動をすることにより、惑星の彷徨運動が成り立つと説明した。しかしこの場合、それぞれの天球を動かす不動の動者が必要となる。アリストテレスはよって、一方では、第一動者すなわち単一者としての不動の動者の存在証明をしつつ、他方では、不動の動者は47あるいは55存在すると推論し、後世の解釈に困難を残すこととなる。

その後の天文学の発展により、惑星の複雑な運動がアリストテレスの理論では説明不可能であることも明らかとなる。2世紀前半に活躍した天文学者プトレマイオスは『ア

ルマゲスト』において、周転円や離心円といった幾何学的概念を導入することにより惑星の運動を説明し、観測される現象に近似した理論を提供することに成功する。その幾何学的理論は、コペルニクス(1473-1543)やガリレオ・ガリレイ(1564-1642)により地動説が有力となる以前の中世において、長らく支持されることとなる。

マイモニデスはこのような中世の時代において、アリストテレスの『形而上学』を、原典からの逸脱も含む自由なアラビア語訳を通じて受容し、不動の動者の存在証明を、唯一神の存在証明に有効なものとして継承する。しかしその論証が永遠の円環運動を出発点としてなされる点、よって世界が永遠であることが前提とされている点は、神による世界の創造という観念に反し、マイモニデスにとって受け容れがたいものであった。ここでマイモニデスにとって課題となるのが、アリストテレスによる証明の帰結を維持しつつも、当の証明の前提となっている永遠説を反駁することであった。

かくしてマイモニデスは、永遠説を創造説に置き換えながらも神の存在論証を有効なものにとどめるという困難な課題に挑戦する。ここで彼が着目するのが、動かすもの(不動の動者)と動かされるもの(天球)は一対一対応しなくともよいとするイブン・シーナー(980-1037)由来の発想である。かくして、主体性の帰属に関して我々に重要な示唆を与える概念が登場する。それは意志である。一つの動者に対し一つの運動が必然的に対応しているのではなく、一つの動者に対し複数の可能な運動が対応し、その中から自由な選択が行われるという想定である。ここに、自由に選択を行う意志をもつ主体としての神が措定されるのである。

さて、動者Aに対して運動Bが一対一対応するとは、B以外の運動はあり得ないという物理学的必然性を示すとマイモニデスは考える。対して、動者Aに対し多種多様な運動が可能的に対応し、それらの中からBが選択されるという想定は、Bとは別様でもあり得たという偶然性を導入する。

以上の議論から着想を得て、本発表は、人工物に対して主体性が帰属させられる複数の可能的条件の一つとして、以下の仮説を提示する。身体的な動かされるものが観測される場合、その観測は、非身体的な動かすものの存在を想定させるが、運動が不規則的で多様であり、一つの動因に対して複数の多様な運動が呼応すると考えられる時にこそ、すなわち必然性ではなく偶然性が見出される時にこそ、我々は動かすものに、一つの選択する意志を見て取る、すなわち主体性を帰属させる方向へ導かれるのではないだろうか。換言すれば、我々が運動を伴う人工物(動かされる身体的なもの／他のものを動かす非身体的なもの)に遭遇する時、その運動が単純で規則的であり、必然性を想起させるものであればあるほど、我々がそれに主体性を帰属させる傾向は低くなり、逆に、その運動が複雑で不規則的であり、偶然性を介するものであればあるほど、我々はそれに意志や主体性の存在を読み取ろうとするのではないか。これを我々の働きかけに対する人工物の反応という観点に應用すれば、反応が一樣ではなく多様で偶発性を含む場合、我々はそれに主体性を帰属しやすくなるということになる。こうした条件は、その他の可能な諸条件(物的特徴等)との複雑な絡み合いの中で、主体性の帰属に一定の寄与をしているのではないか。中世の惑星の彷徨運動をめぐる議論は、そのような仮説の可能性を我々に示唆している。